令和７年度
「つどい、つながる文化の会議」
事業評価について

茨木市文化振興施策推進委員会

令和８年３月

目　次

「つどい、つながる文化の会議」の事業内容等について …Ｐ．１

令和７年度事業実績に対する意見について…Ｐ．３

専門部会委員による事業評価報告書……Ｐ．５

（1）常盤委員……Ｐ．５

（2）宮崎委員……Ｐ．10

「つどい、つながる文化の会議」の事業内容等について

１．つどい、つながる文化の会議

(1) 茨木市文化振興ビジョン（第２期）における位置づけ

茨木市文化振興ビジョン（第２期）を推進するにあたり、多様な主体がつどい、分野を超えてつながる、共創する会議＜つどい、つながる文化の会議 ＞（以下、「文化の会議」という）としている。この会議を通じて、多様な主体や分野をつなぐ人材が育ち、活躍することで、様々な場所・活動・主体が有機的につながり、文化的コモンズの形成の促進が期待される。

(2) 文化的コモンズ

地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営みの総体のことである。(平成26年３月財団法人地域創造提言より)

近年、社会の複雑化に伴い、文化活動そのものだけでなく、教育と文化、福祉と文化、観光と文化、産業と文化等との広範な連携により、文化的コモンズが形成され、それが地方の活力を生み出している。

また、文化的コモンズを形成するには、それを担う人材が必要であり、行政や文化拠点は、地域における様々な担い手と連携しながら、「コーディネーター」を育成・確保する必要がある。

(3) 実施内容

令和７年度は、「市民アートコーディネーター（市民AC）として必要なスキルや関係性の築き方を学び、文化芸術×他分野の取組みを知ることで他者や他団体とつながるアイデアを考える」を目標に掲げ、グループに分かれて他分野の施設や活動の視察に赴き、ビジョンボードの作成を通じて、市民ACの役割の具体的な活動イメージの共有を行った。

本事業は、文化芸術を通じた人や団体との交流を繋ぐ場を活用した市内活動団体との関係構築を推進することで、文化的コモンズの形成に必要とされるコーディネーターの育成や活躍できる場の充実をめざすものである。

＜令和７年度実施状況＞

R7.７月13日	文化の会議①	One Art Project稲垣氏によるICAWツアー、藤野教授（神戸大学名誉教授）による講義
８月２日	〃	②：One Art Projectのお二人による講義
８～９月	〃	③：グループ（３～５名×４グループ）ごとに市内へ視察
９月13日	〃	④：視察内容の共有、視察内容をnote記事にまとめる
10月12日	〃	⑤：室野氏（堺市耳原総合病院ﾁｰﾌ･ｱｰﾄﾃﾞｨﾚｸﾀｰ）による講義
11月15日	〃	⑥：活動の具体化に向けたビジョンボードの作成

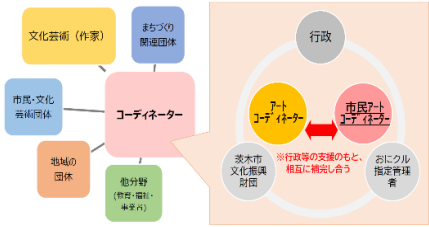
2．市民アートコーディネーター（市民 AC）について

（1）コーディネーターについて

・アートコーディネーター（作家と社会・鑑賞者をつなぐ）

・市民アートコーディネーター（市民や活動等をつなぐ）

⇒参加者（ごちゃの間ファミリー）



（2）市民アートコーディネーターが担う役割

主要な役割

■つどう・・・・・・文化芸術の現場に集まり、事業や活動の力添えをする。

■つながる・・・・文化芸術に興味を持つ市民や実際に活動する市民・団体と交流する。

■つたえる・・・・活動の価値を言語化し、市内外へ広める。※活動：市や財団等の主催事業含む

■つなげる・・・・市内の活動（イベント等）や団体等との仲介をする。

■つくりだす・・・実際にイベント等を企画・運営する。

3．事業評価について

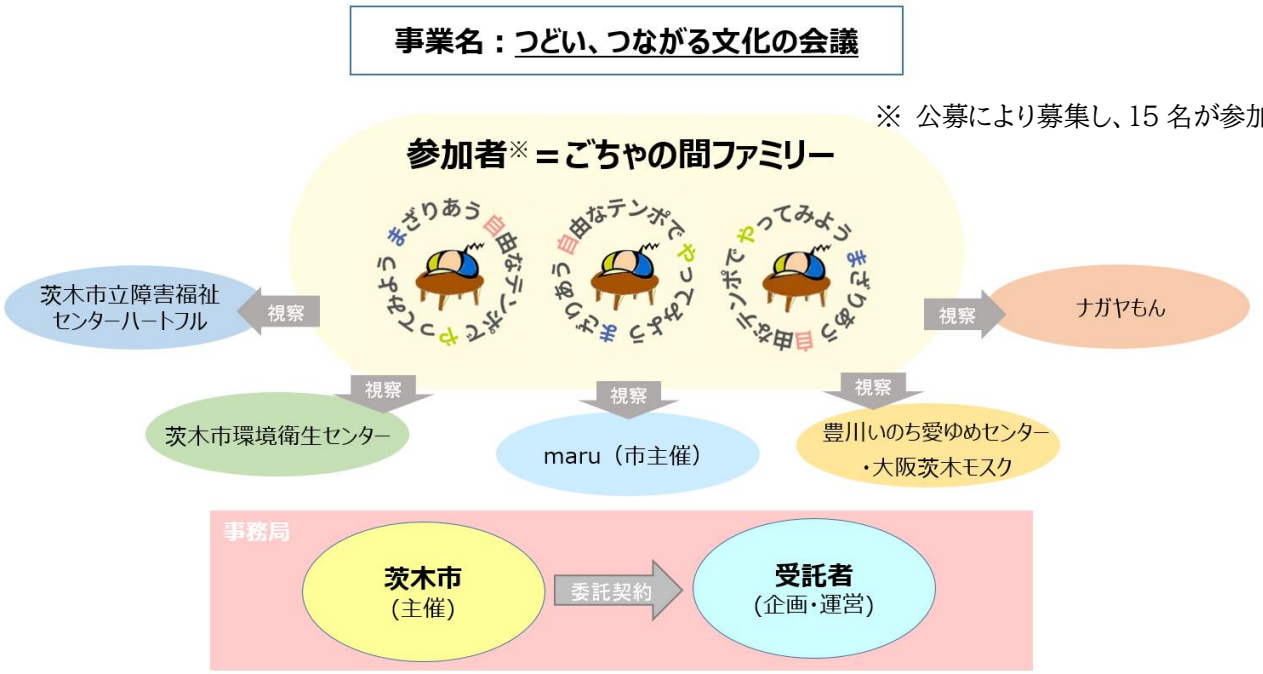
（1）評価の仕方

昨年度に引き続き、現場に赴いていただき、参加者の活動の様子や事務局の運営を踏まえて、専門部会委員のお二人に評価いただく。

（2）事業評価の目的

事業の改善・発展や、事業のアウトカム（参加者の変化等）の共有を含め、来年度の事業実施に向けたフィードバックを想定。

4．体系図



令和７年度事業実績に対する意見について

当委員会では、諮問から本日に至るまで書面開催を含め委員会を３回開催し、専門部会委員の二人が実際に活動の現場に赴く等してとりまとめた事業評価報告書と事務局からの報告を踏まえて、「つどい、つながる文化の会議」の事業評価について審議を行った。第３回の委員会にて、委員からのご意見については、以下のとおりである。

【委員意見抜粋】

・参加者が自発的に発見し、それを少しずつ形にしていくプロセスは、教育とは異なる新しいかたちの学びだと感じています。与える側が場を提供するだけでなく、参加者と双方向で吸収し合い、良い循環を生むことが可能です。さらに、こうした経験が職員の方々の別部署での業務にも役立てられるのであれば、非常に高い意義があると思われます。

市民に公平に参加を募り、能力差で分けることなく、一定の人数を超えた場合には抽選で選び、参加者同士が基本的な共通事項を共有しながら楽しみながら活動を進める形となっています。特に現地訪問（サイトビジット）を繰り返す中で参加者が積極的に関わる様子が見られ、楽しんでいることが感じられました。

茨木市のプログラムには、他の自治体では見られない独自性が潜んでいるように思います。今年度はそれを言語化するのが難しいかもしれませんが、今後の課題として捉えるべきです。参加者同士でトラブルがあった場合や、一部の参加者が途中で来なくなった場合、それを失敗と捉えず、新しい評価ポイントを見つける機会として活かすことができれば良いと思います。

・市民アートコーディネーターが、実際に活動する現場では、受け入れ側となる専門職のコーディネーターの意識やスキルが重要です。ですが、特に大阪や関西では、専門職のコーディネーターが仕事として経験値を積める環境が少ないため、人材が流出してしまうという課題がありますので、今後は専門職の人々が働ける現場を整えることも必要です。

また、次年度以降予定されているプログラムに協力する受け入れ先も、経済的にはギリギリの状況ではないかと想像しますので、受け入れに要する時間や労力に対する報酬／経費を適切に補償することが不可欠ではないでしょうか。そうすることで通常業務を圧迫せず、より充実したプログラムが可能になるかと思います。それぞれの現場でできることは異なるので、相談しながら丁寧にプログラムを設計していくことが必要となるでしょう。

・音楽における活動について、演奏する立場から見ると、市民や専門家であれ音を鳴らしたら音楽になると考えがちです。しかし、本質的には、人に何を伝えるか、どのように感動を与えるかを考えることが非常に重要だと思います。本事業を通じて、市民や子どもたちに感動を与えるような活動を行うことを目指せたらと考えます。

・文化の会議参加者の属性について、多世代にわたる参加が実現したことは非常に良かったと思います。参加者は自分の得意分野や興味のある分野から活動を始めましたが、実践等を通じて他者との繋がりを築き、次年度にはさらにその広がりが期待されると感じています。

・「つどい、つながる文化の会議」が２年間経過し、手探りで進められてきた中で多くの収穫があったことは評価できると思います。今後、次年度は本格的な実践のフェーズに移るかと思いますが、市民アートコーディネーターという名称が広義的に捉えられている現状がある点は課題として認識しています。具体的な目標を明示しながら進めていく必要があると感じます。

・市民アートコーディネーターとは、市民が周囲の人々や物との関係性を再構築し、その中で文化活動を広げる役割を担う存在であるという点です。それは決して一方的に情報を伝えるだけの役割ではありません。人々を自然につなげ、そこで生まれたコミュニティがさらに新たな活動へと広がっていく、そうしたプロセスを支える役割だと考えます。また、その過程で新たな人々が出会い、次の企画が生まれていくという小さな循環こそが、文化を育て、広げていく力になるのだと感じました。

・文化や歴史というものは生活に欠かせないものです。生活のインフラとも言えるべき重要なものだと思います。電気や水道と同様に、インフラと考えた上で進めていくべきではないかと思います。
　私自身が恩師からの助言により、芸術家としての視点を別の分野で活かすことができたように、本事業においても、これまで以上に、茨木市における独自の体験や視点を基にした様々な方の声を取り入れることができれば、より充実したものになるのではないかと思います。

・参加者それぞれが「コーディネーターとは何か」を自身の経験や関心に基づいて考えるプロセスは非常に価値があるものでした。また日常生活や仕事にコーディネーター的視点をプラスアルファで加え、人材としてステップアップしようとする様子が見られた点はとても良かったと思います。特定の目標に向けて画一的に習得する空間ではなく、自身の関心に応じてコーディネーターとしての役割を身につけていく場になっていたのが良い点でした。

・文化芸術というものは、それを享受する市民の存在があって初めて社会の中で意味を持つものでもあります。これは日本国内に限らず、海外で活動していても感じることですが、「つくる側」と「受け取る側」という二項対立のような整理では、文化芸術の実際の姿を十分に説明できないことが多いと感じています。実際には、その間にはグラデーションのように多様な関わり方が存在しています。例えば、音楽でいう実演者と観客の間には、地域の中で文化を支える人、伝える人、つなぐ人、関心を広げる人など、さまざまな役割があり、その“間にあるもの”こそが、文化芸術が社会に必要とされる理由なのではないかと、以前から漠然と感じていました。今回の茨木市の取組、特に「文化的コモンズ」という考え方や、市民アートコーディネーター育成の試みは、その“間にある存在”を丁寧に言語化し、それを育てていく制度として設計されている点で、非常に先駆的な取り組みだと感じています。

専門部会委員による事業評価報告書①

報告日：令和８年３月２日
報告者：常盤　成紀

令和７年度「つどい、つながる文化の会議」事業評価について

評価指標①：文化芸術を通じた交流の機会が充実している

■文化の会議を通じての参加者の行動等の変化

・<u>着目すべきデータ（アンケート結果等資料参照）</u>

まず全体を通してアンケート集計結果の捉え方について、毎回の出席数にばらつきがあり、割合の変化で見るか絶対数の変化で見るか難しいところだが、今回は絶対数の変化に着目し、関係する情報を確認して考察する手法を取った。したがって受託者報告書の自己評価と一部見解は異なるものの（毎回の平均ポイントだけでは評価できない）、アンケート集計結果はおおむね肯定的に捉えてよいと思われる。

「文化の会議参加前と後で、アートやアートを通じた活動について、心境や行動の変化はありましたか？」という質問では、「非常に思う」「まあまあ思う」が高く、室野氏講義の影響が大きいことが見て取れた。また、「全５回の活動を通して、ご自身で「トライできた」と感じることは、いくつありましたか？」という質問では、多くの参加者が具体的な挑戦を実行している。運営側としては今後、それらの挑戦の中でも特に育成趣旨に沿う「挑戦」の広がり、深化を支えるコミュニケーションが求められるだろう。

次に、「今回の活動を通して、新しい出会いやつながりを感じましたか？」という質問の回答を見れば、3 回目（視察回）で数値が向上するのはある意味自然であり、それ以外の回において改善を促すためには、「参加者同士のつながり」を深化させる工夫が今後必要となるかもしれない。ところで、１回目から６回目までの全体的な変化の傾向を見ると実は３回目における上昇を除き基本的に数値が下がっている。ただしそれはおそらく初回の期待値が高い反面、学びや経験を経て個々の自信が現実的なラインに収斂したのではないかと考えられ、それは自然なことでもある。その中で６回目の回答で共通質問に「非常に思う」「まあまあ思う」と回答した参加者の間では、「トライできた」回数に０～５回とかなり開きがある。これは実践に必ずしもつながらなくとも個々に満足感を得ているとみてよい。

・<u>実際にご覧になられた様子（参加いただいた回を通じて）</u>

第５回を視察したところ、講師の話題提供後に実施されたディスカッションの中で、「アーティストだけでなく関わるみんなの思っていることをコーディネートするのが求められているのかも」「ジャンルでアートを表現するのは簡単だが、本質的なところでアートに取り組むのも大事だと思う」という発言があり、アートコーディネーターやアートに関する学びが深まっていることがうかがえた。個人の考え方の変容を周囲に伝えられるようになった様子は、広くとれば行動等の変化といってよい。

・<u>参加者インタビューにおいて着目すべき意見（受託者意見含む）</u>

前項同様、学びの深まりも含めて記述する。インタビュイーの中にはコーディネーターを市民とアーティストの間に立つ一者ではなく、様々な領域の中に存在し、発信やつなぐ役割を担う存在なのではないかと思うに至ったと話した。そして今後は、アートの側だけではなくそれを受け取る人々がどのように感じ、効果を得ているのかも確認できることで、より現実的なアート実践に落とし込めるのではと語

り、そのようなコーディネーター像を目指すと話した。また別のインタビュイーは、公立施設で働く経験から施設のリソースを活かして社会課題にアプローチできないかと考えるようになったと話した。これらは近い将来の具体的な行動変化を支える重要な兆しである。

■文化の会議を通じた参加者同士や事務局との交流

・<u>着目すべきデータ（アンケート結果等資料参照）</u>

「文化の会議への参加がきっかけとなり、色々な活動をされている方に興味を持ち、話を聞いたり関わりをもったりする機会が増えました。」という意見がある一方、「メンバーの関心も多様で、参加目的や意識にも温度差があったように感じました。」という意見を始め、中にはコミュニケーションが成立しづらい状況に困惑する意見もあった。実際に参加者各自の経験の有無や参加動機のばらつきによって生じたものと思われる。

・<u>実際にご覧になられた様子（参加いただいた回を通じて）</u>

グループワークを見る限りおおむね良好な関係性の中で対話が行われていたと認められる。特に運営側である市や受託者もフラットな場づくりに徹し、寄り添う姿勢を見せていた。アンケート集計結果に見られる運営への好意的評価はそれを裏付ける。また例えば第４回の視察においては、参加者が視察成果をグループ内で共有するのにゆったり時間を使っていたのがよかったように感じた。

・<u>参加者インタビューにおいて着目すべき意見（受託者意見含む）</u>

インタビューでは、「同じ茨木に住みながら、世代や見ているもの、感じているものが違う人たちと話をすることができて刺激を受けた」という意見や、アートとは何かをめぐって表出する考え方の違いを面白く受け取ることができたという意見（例えば「本物」のアートは存在するのかという議論）等があがり、アンケート集計結果だけでは見えなかった肯定的見解が確認できた。

他方で、参加者それぞれのバックグラウンドが互いに分からず、時にネガティブな発言になったり、発言をネガティブに受け取ってしまったりということが起こったという報告があった。この課題は受託者側も認識していた。文化の会議に求めるレベル感が参加者によって異なり、参加者自身もそれぞれ関わり方を悩んでいた。多様な市民が集う場のマネジメント、デザインはいかにあるべきかの困難が受託者へのインタビューで語られた。

【コメント】

本指標①を構成する「参加者の行動変化」及び「相互交流」は、次指標②の主要素「働きかけ」と原因結果関係にあるといってよい（「令和７年度 評価指標とデータ項目等との関連について」参照）。また、令和７年度は学びやアイデア形成をゴールに置く中で、学びやアイデア形成が個人の中で実現するほど「行動変化」を促し、またその学びやアイデア形成を他者と共有することで「相互交流」につながる、という関係性にある。

ここにあってまず視察や講義から示唆を受けた様子は十分に確認でき、参加者によっては「トライ」に結びついていた。他方でそれが「相互交流」につながっていたかについては課題が残った。すなわち、運営側の努力はありながらも、参加者の多様性を包摂する事業運営上の難しさと、その前提となる育成方針の明確化に関する課題によって、部分的にコミュニケーション不全が起こる状況であった。この課題に対しては、具体的な現場実践を本事業に実装しそこでの試行錯誤を通して、運営者や参加者自身が解を見出していくしかない部分があるだろう。

評価指標②：だれもが文化芸術とつながる環境がつくられている

■参加者に市民 AC として活動してもらうためのはたらきかけ

・着目すべきデータ（アンケート結果等資料参照）

「全６回の活動を通して、コーディネーターとしての役割等について、理解が深まりましたか？」という質問では、数値的にも高く、理念や求められる態度については理解が深まっていたとみてよい（インタビュー結果からもその結論が支持される）。他方記述では、具体的な実践イメージを持つに至らない声もあり、今後は理念と実践を架橋するデザインが求められる。その傍証として、例えば全体的に室野氏の講義は多くの参加者に影響を与えていることが各記述から確認できる反面、同回の数値は他回と比べて必ずしも高くない。理念に感銘を受ける一方、自分事として具体的に考えるにはまだ時間がかかることの表れといえる。

また、「市民アートコーディネーターとして今後取り組んでみたいことがあれば、ご記入ください。」という質問では様々な回答が得られたこと自体素朴に良いことである。今後はさらに、どんなイベントをしたいかだけではなく、そのイベントでどういう役割をしたいかまで意見が出るような働きかけが求められる。なお「地域社会に貢献したいという気持ちは高まりましたか？」という質問への回答については、全体的に数値が下がっているとはいえ「まあまあ思う」に収斂している傾向があり悪くない結果だといえる。

・実際にご覧になられた様子（参加いただいた回を通じて）

すでに言及した通り、運営側である市や受託者がフラットな場づくりに徹し、参加者に寄り添う姿勢を見せていたのが印象的だった。他方で、そこまで気を遣わなくとも、市も受託者も時には踏み込んで自身の価値観を伝えてもよいのではと思うところもあった。もちろん、忌憚のないコミュニケーションを取れるようになるまでには時間がかかるだろうし、個々のパーソナリティにもよるだろう。安心安全の場づくりは十分実現できているので、次はよりインタラクティブな場になるとよいと思う。

■note 記事のビュー数、いいね数

note 記事については実際に私も読ませていただいたが、読み物として面白い部分はあったものの、広報としてどれだけ訴求効果があったかは確認できなかったため、次年度は注視していく必要があると考えられる。また、フォロワー数については、おそらく関係者の人数を下回っている状況なので、次年度以降は身近な人々からフォローを促していくことが必要ではないかと感じた。

【コメント】

グループワークの進行、視察や講義の設定を通して、学びや学びの言語化、共有に関する働きかけは積極的に行われていたことが評価できる。実際に現場を見たり、アーティスト等の当事者と話したりすることでようやく理解できることは多い。その意味で参加者の多くが現状、まだ学びを必要とする段階にあるともいえる。他方で、同時並行して参加者が自らコーディネーターとしてのイメージを膨らませていくにあたっては、前指標①コメントにも記したように、コーディネーターとしての具体的な現場実践の体験が今後は必要となるだろう。講義で理念への理解を深めるだけではむしろ抽象度の方があがりすぎてしまう。具体的な実践が伴うことで、参加者各自が関われるレベル感や内容を改めて自ら問うことができるようにもなるだろう。

評価指標③：気軽に文化芸術活動に参加できる機会、きっかけが充実している

■文化芸術にふれる機会としての文化の会議の役割

・着目すべきデータ（アンケート結果等資料参照）

「文化芸術活動に対して、以前より「関わりたい」と思う気持ちが高まりましたか？」という質問への回答では、「まあまあ思う」が常に同水準を維持している部分が評価される。また、「新しいことへの好奇心や、アイデアを得ることができましたか？」という質問について、大変興味深いことに、全共通質問のうちこの質問への回答だけは３回目がピークではなく、むしろ最終回で数値が持ち直している。６回かけてようやく好奇心やアイデアが形になったという参加者がいたのかもしれない。

・参加者インタビューにおいて着目すべき意見（受託者意見含む）

たびたび言及される参加者の多様性を本事業がどのように包摂できるかという課題について、インタビューの中で受託者からも、気軽な参加者と熱量の高い参加者がいたり、知識や経験に参加者同士で差があったりする中で、「どのように均していくのが正解かもわからない」という正直な気持ちが聞かれた。ただその中にあっても受託者が、例えば気軽な参加者が「自分は場違いかもしれない」と思わないように、どんな動機の参加者もその場にいて取り組みに関わることが可能な（実際には「関わることが許される」と表現されていたが含意を踏まえて置き換えた）場なのだということをどう「設計」できるかが大事だと気付いたと語り、次年度以降の重要な示唆であると感じた。

【コメント】

実は参加者の中にはアンケートで「もっと主体的にならねばと反省した」という趣旨の意見もあり、何も参加者は「運営側がもっと考えてくれなければ困る」というだけの態度を決め込んでいるわけではない。その意味では、コーディネーター育成方針はどうあるべきか、多様な背景の参加者が包摂される場がどう作られるべきかは、参加者と対話的に見出していくという方向性もありうるのかもしれない。もちろん運営側には一定の仮説が必要であるが、その検証は参加者に開かれていてもよいと思われる。

《総括コメント》

「市民アートコーディネーター」の育成というとき、実は「市民」も「アート」も「コーディネーター」も定義が極めて難しい概念である。その中でも本事業は果敢にこれらにまつわる理念を追究し、「市民アートコーディネーター」を社会実装しようとしている。その手探りの事業推進の在り方それ自体が、実はワークショップ的だといえる。私たち専門委員もまた、そのワークショップのメンバーに加わっているつもりだ。

今回の成果検証を行う過程で、経験や知識の量、あるいは熱量の異なる多様な背景の参加者同士がすれ違う様子や、それに対するマネジメントの課題が確認された。言ってみればこういう「コスト」がかかるにもかかわらず、それでもわざわざ市民アートコーディネーターを「育成」し、協働してこうとすることがなぜ大切なのか、今一度考えたい。それは端的に職業者には／職業者だけではアプローチできない水準や領域があるからに他ならない。そうであるのに私たちは、ともすれば参加者である市民を職業者予備役のように対象化していないだろうか。あるいはそういう育成の場だと、参加者自身も認識してしまってはいないだろうか。

当然ある専門性を軸に取れば、それに詳しい、詳しくないという序列が出来上がる。ひいては、職業者アートコーディネーターの職域の一部を市民に切り出す（この部分ならできるでしょう、という具合に）、というような発想になる。しかしそもそも、「市民」とひとくくりにされている彼ら一人ひとりを見れば、皆それぞれに関心事があり、熟知していることがあり、思い入れを持っている個別多様な人々である。人はそれぞれに一日の時間の使い方があって、その中で一日中コーディネーターをしているのが職業者コーディネーターであるというに過ぎない。そんな生活を送る私たち職業者が知らないたくさんのことを、「市民」とくくられる人たちはそれぞれによく知っている。私たちは「市民を育成する」というけれども、まず私たちがその彼ら市民のことを十分に知っているだろうか。経験や知識の差で気後れする参加者が現れてしまっているのは、その人の良さ、つまり「市民」の良さが活かされていないのではないかと常々思う。今一度、これまで抽象化されてきた「市民」の個別具体性を取り戻すのが大切であると感じる。その先に、市民の持ち寄るべき得意技や専門性が改めて浮かび上がるだろう。

その可能性が実はインタビューに現れていた。インタビューで参加者からは、コーディネーターとは誰かと誰かの真ん中に立つ抽象的な存在ではなく、いろんな領域にコーディネーターがいて、それぞれが発信したりつながろうとしたりするものだと思えるようになったと話していた。またそうであるから、自分はよりアートを享受する側の目線に立って声を拾っていきたいと抱負を述べていた。さらに別の参加者は、公立施設での勤務経験から、施設の使われ方が勿体ないと日々思っており、越境できる存在としてのコーディネーターがこうしたリソースを活用できる存在になるとよいと思ったと語った。そして他者の関心や困りごとを「聴く姿勢」と相手に応じて物事を提案できる力が大切だと述べていた。誰しも生きていれば気になることが生まれてくる。インタビュイーそれぞれ、そうした自分の生活から出発して活動につなげようとしており、その多様性と固有性こそが「市民アートコーディネーター」の可能性である。２年間の文化の会議は、ここに小さく確実に成果が実りつつある。

それではどうすればそうした「市民性」が活かされるかといえば、具体的な現場実践の中で、自分自身の固有性が取組とつながる部分を探そうとする（あるいは見つける）経験を繰り返していくことにあるだろう。実際、どういう取り組みが自分にぴったりはまるかは、やはりやってみないと分からない。他方で、あまり実践経験のないまま（頭の中だけで）頑張って探そうとしても、なかなか見つからない。むしろこういうものは、いろいろやるうちに出会うものであり、あるいはふと腑に落ちる瞬間が来るものでもある。だから本事業では次年度以降、そのきっかけとして具体的な実践が設定されるのがよい。

５つの「つ」はコーディネーターのスキル一覧であると同時に、自分たちが自分の得意なことを見つける指標となり、また協働する仲間の強みを探す指標ともなる。全部を網羅する必要はない。すごいコーディネーターにならなくてもよいし、すごい事業をやるだけが成功ではない。自分の望む規模感、レベル感を共有できる仲間が見つかることが大切だ。次年度以降は、そういう現実的な感覚を身に着け、小さな成功体験を無理のない範囲で獲得できるような経験の場が設定できるとよいと思う。

※事業評価にあたってのアンケート結果等のデータについては、受託者からの活動実績報告を参照

専門部会委員による事業評価報告書②

報告日：令和８年３月２日
報告者：宮崎　優也

令和７年度「つどい、つながる文化の会議」事業評価について

評価指標①：文化芸術を通じた交流の機会が充実している

■文化の会議を通じての参加者の行動等の変化

アンケート結果（4 段階評価）を通年で見ると、文化芸術への関与意欲および新しい発見や好奇心の獲得は、初回から最終回まで比較的高い水準を維持している。初回では関与意欲が平均約 3.6 と高く、参加者の多くが当初から文化芸術に対して前向きな関心を持って参加していたことがうかがえる。その後、数値は回ごとに小さく揺れながらも、最終回でも約 3.3 程度を保っており、関心が大きく失われることはなかった。

より特徴的なのは、「新しい出会いやつながり」の項目である。初回では平均約 3.1 であったものが、中盤では約 3.7 まで上昇しており、参加者同士の関係性が時間をかけて育っていった様子が定量的にも確認できる。一方、「周囲に紹介したい」という外部波及を示す項目は、中盤で一度高まった後、後半では相対的に落ち着く傾向を示している。これは交流が弱まったというより、関係性が内側で深化する段階に入り、外へどう接続するかが参加者にとって見えにくくなった可能性を示唆している。

なお、本事業の設計上、本年度は外部発信や広範な波及を主たる成果指標には置かれておらず、参加者が安心して集い、対話し、関係性を深めること自体が重要な到達点とされていた。そのため、外部への紹介意向が後半で落ち着いたことは、必ずしも停滞や後退を意味するものではなく、むしろ内的な関係性の成熟段階に移行した結果として解釈することができる。

この傾向は、会議を通じて実際に観察された様子とも整合する。第 2 回時点では、各回冒頭の振り返りが参加者間の共通理解を形成するうえで有効に機能していた一方、「つどう・つながる・つたわる」という役割概念が、日常の行動としてはまだ具体化されておらず、議論が目的から逸れやすい兆しも見られた。こうした課題は回を重ねる中で完全に解消されたわけではないが、参加者同士の信頼関係が形成されるにつれ、「どこまで自由に話してよいのか」「何のために集まっているのか」という問いとして、より自覚的に共有されるようになった。

参加者インタビューでは、「茨木市内のアートイベントに自分から参加するようになった」「会議で知り合った人から別の活動に誘われた」といった具体的な行動変化が語られている。これらは、文化の会議が単なる対話の場にとどまらず、参加者の行動を市内の実践へ接続する起点として機能していたことを示している。また、受託者も、参加者が自らの関わっている活動について積極的に「つたえる」ようになり、情報の受発信が活性化していると評価している。

■文化の会議を通じた参加者同士や事務局との交流

参加者同士の交流は、会議内のグループワークにとどまらず、会議外での活動や別事業への参加へと発展した例が確認されている。受託者は、文化の会議以外の場でもつながりが広がり、参加者同士が一緒に活動に参加する関係性が生まれていたと述べている。これは、「新しい出会いやつながり」の評価が中盤

で上昇した定量結果を、定性的に裏づけるものである。

また、事務局や受託者がディスカッションに入り発言と対話を促すことで、参加者が「この場では自分の思うことを言ってよい」と認識するようになった点は、交流を成立させる前提条件として重要である。一方で、関係性が成熟するにつれ、議論が文化芸術の枠を超えて市政全般や市民活動一般へ拡散する場面も増え、目的に沿った対話をどう維持するかという課題が顕在化した。

これは交流が不足しているからではなく、むしろ交流が十分に成立したからこそ表面化した論点であり、本会議が「安心して語れる場」として第一段階に到達しつつあることの裏返しと捉えることができる。

【コメント】

文化芸術を通じた交流の機会は、量・質ともに一定程度充実しており、参加者同士の関係性が会議外へも波及する段階に至った点は評価できる。一方で、交流が成熟したがゆえに、「その交流をどこへ接続するのか」「何をもって次の段階とするのか」という共通理解が不可欠となっている。交流の充実は本年度において概ね達成されており、次年度はその交流を外部波及や役割実感へと接続する設計が求められる。

評価指標②：だれもが文化芸術とつながる環境がつくられている

■参加者に市民 AC として活動してもらうためのはたらきかけ

アンケート結果からは、文化芸術への関与意欲や好奇心が高く維持されている一方で、「市民アートコーディネーターとしての理解が深まったか」という役割理解に関する項目では、最終回においても評価が相対的に控えめであった。肯定的回答は多数を占めるものの、「非常に理解した」と言い切る参加者は多くなく、理解がなお形成途上にあることが示唆される。

しかし、この結果は必ずしも否定的に捉えるべきではない。市民アートコーディネーターと専門職としてのアートコーディネーターは、上下関係や代替関係にあるのではなく、役割の異なる補完関係にある。本会議の目的は、あくまで「茨木市版の文化的コモンズの形成」にあり、イベントや企画の実施はそのための手段の一つに過ぎない。

本事業では、市民アートコーディネーターは「一定の役割を遂行する人材」として完成させることを目的としておらず、「関わり方を模索し続ける存在」とされるべきである。

その観点から見ると、本年度は、市民アートコーディネーターが「完成した役割」として育成される段階ではなく、市民が安心して関わり方を模索し、「どのように関わることが許されているのか」「自分はどの位置にいるのか」を問い続けられる第一段階に位置づけられる。参加者インタビューで語られた「越境できる人」「聞くことを大切にする人」「裾野を広げる存在」といった市民 AC 像は、役割を一義的に定義するものではなく、それぞれの生活や関心から引き寄せて理解されている点に特徴がある。

受託者と参加者が整理する「自由なテンポで」「まざりあう」「やってみよう」というキーワードは、市アートコーディネーターを即戦力として育てるのではなく、関わり方の裾野を広げる存在として支える姿勢を示しており、本年度の到達段階と整合的である。本評価で確認された役割理解の揺らぎは、こうした事業設計と矛盾するものではなく、むしろ意図されたプロセスの一部として位置づけることができる。

■note 記事のビュー数、いいね数

note 記事の執筆は、参加者が「つたえる」役割を実践的に経験する機会となった。受託者は、執筆に伴走しながら、参加者が伝えたい内容と伝え方を意識できるよう支援したと述べている。閲覧数や反応数といった数値は、現時点では成果を評価するための主指標というより、参加者自身が「外部に届いた感覚」を得るための補助的な材料として位置づけるのが適切である。これらの数値が最終回等で簡易的に共有されれば、役割理解と外部波及を結びつける実感が生まれやすくなると考えられる。

【コメント】

市民アートコーディネーターとしての役割理解が一義的に定まらないことは、本事業の課題であると同時に、本年度が主として第一段階（場づくり）に位置していることを示す成果でもある。だれもが文化芸術とつながる環境をつくるためには、役割を固定化するよりも、関わり方の多様性と「問い続ける余白」を確保することが重要であり、次年度はこの余白を保ちつつ、行動と段階を参加者自身が把握できる設計が求められる。

評価指標③：気軽に文化芸術活動に参加できる機会、きっかけが充実している

■文化芸術にふれる機会としての文化の会議の役割

アンケート上、文化芸術への関与意欲が初回から最終回まで高水準で維持されていることから、文化の会議は「参加してよい」「関わってよい」と感じられる入口として十分に機能していると評価できる。参加者インタビューでも、会議をきっかけに市内の文化芸術活動へ足を運ぶようになったという声が複数聞かれ、心理的ハードルを下げる効果が確認される。

一方で、回を重ねるにつれて、「次に何をすればよいのか」「自分はどこまで関わる存在なのか」が見えにくくなる局面も生じている。これは、気軽な入口としての成功と、その先の行動設計との間にギャップが存在することを示している。アンケートで外部波及（紹介意向）が後半に落ち着く傾向を示した点も、このギャップと無関係ではない。

もっとも、最終回においてはビジョンボードの作成等を通じて、参加者が自らの関心や関与の方向性を具体化する機会も設けられており、本年度の範囲において提示可能な「次の一歩」は一定程度示されていたと評価できる。

【コメント】

文化の会議は、文化芸術活動への入口として十分に機能しているが、その入口を通過した後の「次の一歩」をどのように示すかが次年度の課題である。気軽さを損なわずに行動へ接続するためには、各回テーマとプログラムの整合を高め、参加者が自分の位置と次の段階を把握できる設計が必要である。

《総括コメント》

本事業を評価するにあたり、市民アートコーディネーターと専門職としてのアートコーディネーターは、役割の異なる補完関係にあるという前提を明確にしておく必要がある。市民アートコーディネーターは生活者の視点から文化芸術と人・地域を結びつける存在であり、専門的な企画や実装を担うプロのアートコーディネーターとは異なる役割原理に立っている。

その観点から、本会議の成果は、①市民が安心して集い、対話し、関係性を育む「場づくり」の段階と、②その関係性を基盤として、市民と専門職が協働し「つなげる・つくりだす」段階の二段階で整理することが妥当である。本年度は、このうち第一段階において、着実な成熟が確認できた年度であった。

アンケートの定量結果からは、関与意欲や好奇心が高水準で維持され、交流の実感が中盤で明確に高まったことが確認される。一方で、外部への波及や役割理解が後半で伸び悩む傾向も見られ、交流が成熟したがゆえに次の設計が求められる段階に入ったことが示唆される。

参加者・事務局・受託者が率直に悩みや不安を共有できる関係性が形成されたこと自体は、本事業の大きな成果である。その一方で、交流を外部波及や具体的な役割実感へどう接続するか、評価指標をどう参加者の実感に翻訳するか、ファシリテーションの共通言語とプロトコルをどう整えるかといった課題が、次年度に向けて明確になった。

本事業は、即時的な成果を求める人材育成事業というより、文化的コモンズを支える市民の基盤を長期的に育てる試みである。その意味で、本年度は「未完成であること」が否定されるべきではなく、むしろ次年度以降の設計改善に向けた論点が具体化した年度として、前向きに評価されるべきである。

※事業評価にあたってのアンケート結果等のデータについては、受託者からの活動実績報告を参照